

●優秀賞

楽しく学び、確かな力を 育む国語科授業の創造

～キーワードは、「学びやすい」、「学びたくなる」、「学び続ける」！～

大分県佐伯市立佐伯南中学校 いしだ しゅういち 石田周一



はじめに

これまでの5年余り、学習者一人ひとりが、より楽しく学び、そして、より確かに基礎・基本を定着させることのできる国語科授業の確立をめざした研究を進めてきた。

毎年入れ替わる、目の前の学習者とともに、様々な実践を重ねてきた結果、次の三つを柱とする国語科授業をデザインするに至った。

- I 「学びやすい」学習環境づくり
- II 「学びたくなる」学習活動の工夫
- III 「学び続ける」学習の手立ての開発

本論文においては、これまでの研究の経過を報告し、その成果と今後の課題を明らかにしたいと考える。

1 研究の出発点は、学習者の実態

図1は、平成22年度1学期に実施した、第1学年国語科中間テストの得点分布図である。

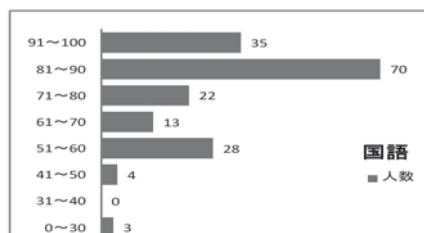


図1 国語科得点分布表（第1学年）

これを見ると、上位層と下位層に挟まれた中間層の割合が低いことが分かる。同様の傾向は他学年においてもみられた。

また、下位層の学習者の授業態度を分析したところ、「授業中の発言が少ない」、「課題を提出しない」、「ノートへの記録が乱雑である」等、ある程度共通した実態がみられた。

さらに、学習者自身の国語科授業についての考えを調査したところ、「授業は好き」であるものの「何をどうやって書けば答えになるのか、よく分からない」、「自分の考えを思うように表現できない」、「時間が足りない」等、学習上の「困り」を有している学習者が少なくないことが分かってきた。

そこで、こうした学習者の実態に着目し、これらの実態に即した手立てを導入することにより、効果的に基礎・基本の定着が図られるのではないかという仮説を立て、実践及び検証することにした。

2 「I『学びやすい』学習環境づくり」の実践

(1) 「授業のユニバーサルデザイン化」の導入

学習上の「困り」の解消の手立てとして参考にしたのが、米国のCASTによる「学びのユニバーサルデザイン化」という概念である。

この概念を基に「できるだけ多くの学習者が利用可能である学習環境をデザインすること」

をコンセプトとし、授業改善に向けたポイントを、次のように設定した。

- 学びの「見通し」がもてる授業スタイルの確立
- 授業の流れがとらえやすい「板書の工夫」
- 「視覚的な理解」を促す掲示物の工夫
- 学習者を「肯定的に評価」する言葉かけの充実
- 全員に「活躍の場」を保障する学習活動の導入

(2) 実践

①「授業のパターン化」及び「学習活動の明示」
学習者が落ち着いて授業を受けられるようにするために、毎時間の授業の流れをある程度パターン化し、常に同じスタイルの授業を展開することにした。

1時間の授業の流れは、次のとおりである。

【a. めあての確認】→【b. 学習活動】→
【c. めあての達成】→【d. 学習の振り返り】→
【e. 確かめの時間(随時)】

特に、【a. めあての確認】においては、「めあて」とともに、その達成に向けた学習の順序を予め示し、学びの「見通し」がもてるように配慮した。

②視覚化に配慮した板書

板書については、「めあて」や「学習活動の流れ」等の掲示場所を固定化し、さらに、文字の色分けや図表等の掲示により、学習した内容や重要な部分等が視覚的にとらえやすい板書を心がけた。(写真1)

③「学習記録用紙」の導入

授業内容の記録が思うようにできない学習者に配慮し、板書と一体化した「学習記録用紙」を作成した。

授業前に1枚配布し、授業が終わるたびに、専用の紙ファイルに綴じて提出させ、評価の後、

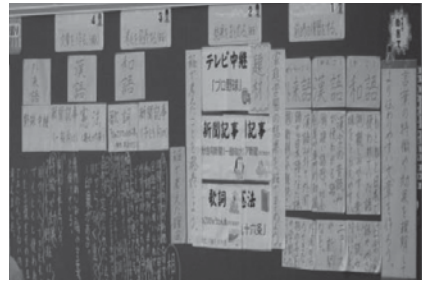


写真1 視覚化に配慮した板書の様子

次の授業までに返却した。学年末には、内容を分類・整理させ、オリジナルの「国語科学習記録帳」を完成させた。

④学習者一人ひとりが活躍する場の設定

全ての学習者が、より主体的に学習に取り組めるようにするためには、「ペア学習」や「グループ学習」等を意図的に組み入れ、学習者相互の考えを紹介・交流する活動が有効であると考えた。

そこで、毎時間一度は、ペアや班を形成し、学習者相互による学習活動を取り入れるようにした。(写真2・3)



写真2 班で協議する学習者の様子



写真3 協議結果を報告する学習者の様子

⑤学習の定着を確認する「確かめの時間」

学習者一人ひとりの学習内容の定着を把握するために、随時「確かめの時間」を設定した。

その時間に学習した主要な内容を、小テストの形で出題し、その結果に応じて、適宜補充的な学習を取り入れるようにした。

(3) 検証

年度末に「授業のパターン化」及び「学習記録用紙」に関する意識調査を行い、基礎・基本の定着度順にA～C層に分け、それぞれの考えをグラフ化した。

図2は「授業の流れをパターン化することで、以前と比べ学習しやすくなったか」という問いに対する答えである。

A層では、大きな意識の変化はみられない。一方、B層、C層の学習者については、「学習しやすくなった」という意見が多くみられる。特にC層の学習者にとっては、明らかに意識の変化が生じていることが理解できる。

その理由の欄には、「何をやるかが分かるから」、「何を勉強すればよいか、はじめに教えてもらうほうがよい」等の記述があり、学習の流れや到達点を開始時に知らせることが、授業の受けやすさに反映されていることが分かった。

次に、「学習記録用紙」の結果(図3)を見ると、B層、C層だけでなく、A層でも使いやすさを実感している学習者が多いことが分かる。

何よりも、これまで板書のメモが十分にできなかった学習者が、この「学習記録用紙」を導入することで、以前と比べ、授業内容を記録する力が、飛躍的に向上したことは大きな成果ではないかと考えている。

3 「Ⅱ『学びたくなる』学習活動の工夫」の実践

(1) 学びの原動力は、「学習意欲」

図4は学習者の「学びの構造」をイメージ化したものである。

学習活動の原動力である「学習意欲」は、学

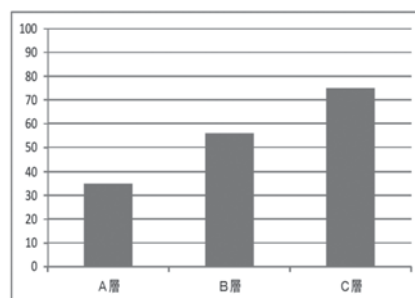


図2 「学習しやすくなった」と答えた割合

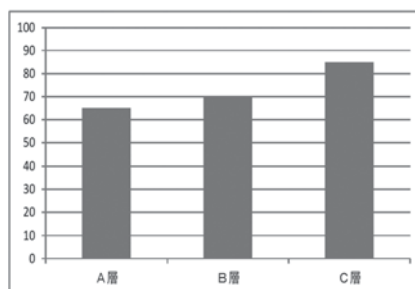


図3 「メモがしやすくなった」と答えた割合

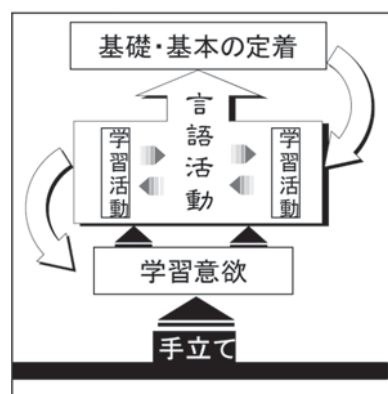


図4 授業者が考える「学びの構造図」

習者に「学びたい」という思いをもたせる手立てにより、大きく高められ、そうすることで、学習活動は活性化し、全ての学習者に、より「主体的な学び」をもたらすものと考え、単元学習を構想してきた。主な主題名は、次のとおりである。

【第1学年】

- 【新生活を紹介しよう。『〇〇先生、中学校ってこんなところだよ！】
- 【さまざまな古文についてのブックトークをしよう！】

【第2学年】

- 【外国人用の「佐伯市観光パンフレット」を作成しよう】
- 【東日本大震災の被災者に向けて、自分の思いを届けよう】
- 【福岡市VS佐伯市、自分が暮らす町をPRしよう！】

【第3学年】

- 【小学校低学年向け「佐伯漁港への道案内」を書こう】

- ア.「ちょっと立ち止まって」（光村図書）
- イ.「段落のまとまりを意識して書こう」（光村図書）

図5は、単元「新生活を紹介しよう。『○○先生、中学校ってこんなところだよ！』」の学習の流れである。

指導にあたっては、まず「ア」、「イ」を用いて、分かりやすい文章の構成の仕方や題材の設定等について学習した。

次に、ワークシートを用いて報告文の下書きを行い、その後、相互評価、清書へとつなぎ、最後に報告文を完成、送付する全7時間扱いの学習とした。

③授業の実際について

写真4は、第5時の様子である。

前半は学習材「ちょっと立ち止まって」を用いて、「序論」、「本論」、「結論」の構成法につ

(2) 実践例Ⅰ：「新生活を紹介しよう。『○○先生、中学校ってこんなところだよ！』」

①学習計画及び評価規準

(以下表1参照)

②学習材について

本単元で用いた学習材は、次の2点である。

表1 学習計画及び評価規準

	学習内容	評価規準	指導事項
1次	全文を読み、文章のおおまかな内容を理解する。	文章全体のながれを大まかにとらえることができる。	「読むこと」 (1)ーイ
	文章の構成(組み立て)を整理し、それぞれのまとまりの内容の要点を理解する。	図と文章の関係を整理して説明の内容をとらえ、まとまりことの要点をとらえることができる。	「読むこと」 (1)ーイ
	筆者が最も伝えようとしている考えを読み取る。	筆者の考えが書かれている文を的確にとらえることができる。	「読むこと」 (1)ーイ
	日常生活を振り返り、筆者の考えにあてはまることについて考える。	日常生活の中から、筆者の説明している事柄と共通する経験や、筆者の考え方を生かすことのできる場面を探すことができる。	「読むこと」 (1)ーオ
2次	中学校生活の様子についてまとめるために、材料を集め、三段構成の構想メモを作る。	日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめることができる。 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成することができる。	「書くこと」 (1)ーア ----- 「書くこと」 (1)ーイ
	それぞれが書いた文章を読み合い、内容などについて意見交流をする。	友だちの文章に関心をもって読み、書き方・内容の観点から積極的に評価することができる。	「書くこと」 (1)ーオ

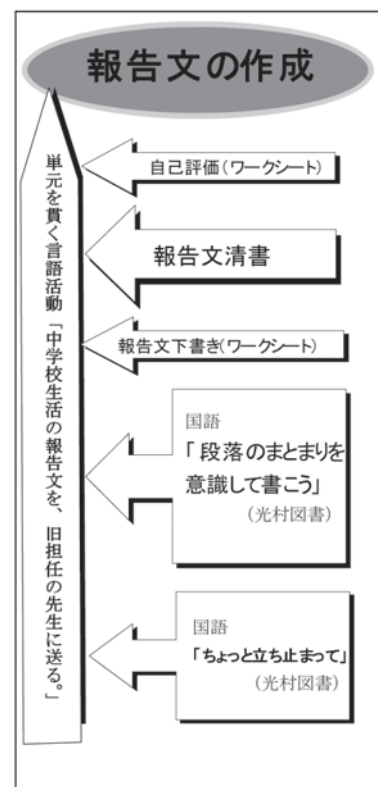


図5 単元学習の流れ

いて学習した。

後半は、自らが報告する内容についての「観点」を考え、班で交流した後、学習者ごとに「紹介する内容」を決定させた。(写真5)

その後、下書き用のワークシートを配布し、構



写真4 第5時、前半の板書



写真5 第5時、後半で「観点」を決める学習者

成を意識させながら、報告文の骨子を作成させた。

最後に、4人グループを編成し、順に報告文の構想を説明させ、その内容について相互評価を行わせた。

その際、気がついたこと等は、全て付せんに記入させ、互いに交換させた。

そうすることで、学習者相互のアドバイスを、より活用されやすくなるよう配慮した(写真6)。

これをもとに、各自で文章を作成、推敲、そして清書へとつなげ、最後にそれぞれの6年時の担任のもとへ報告文を送付した。

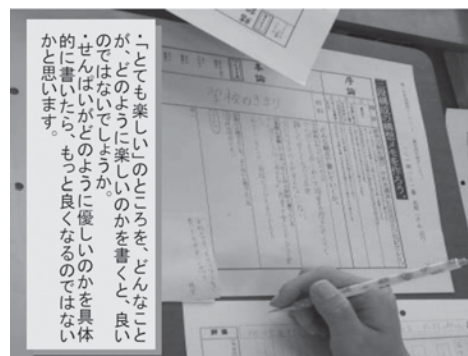


写真6 ワークシートとアドバイスを記した付せんの内容例(左枠)

④検証

次ページにあげる文章は、学習者Aによる報告文である。ワークシートをもとに、「序論」、「本論」、「結論」という3段構成を意識して作成していることが分かる。

さらに、単に新生活の様子を報告することに留まらず、そうした生活の中での自身の考えや今後の目標にまで内容が及んでいることも評価される。

また、次の文は、「学習記録用紙」に記された学習者による、学習後の感想である。

- 文章の構成を整えたり、具体的な例をなるべく身近なことからとりあげれば、読む人が、とても分かりやすくなるということを理解し、意識して報告文を書くことができた。
- 伝える人のことを考え、なるべく分かりやすく文章を書くということを、今まであまり考えたことがなかったので、今回の勉強はとてもいい経験となった。

両者とも「より伝わりやすい文章」をめざして、主体的に学習に取り組んだことが理解できる。

報告文送付後、旧担任の先生からの返信の手紙には、学習者に向けて次のようなコメントがあった。

中学校生活について

学習者A

入学してあっという間に二ヶ月が経過した。初めのころは、いろいろとわからないことが多く、戸惑うこともあったが、今は少しずつ慣れてきたところだ。中学校では、小学校と違うところが、たくさんあった。その中でも、一番違うと思った「部活動」について報告したいと思う。

私は、吹奏楽部に入部した。楽器は「トロンボーン」になり、毎日がんばっている。二ヶ月経った今、練習は大変だが、同じパートの先輩や友だちと仲よくやっている。部活動は放課後に始まり、だいたい六時半ごろまで練習する。だから、家に帰りが七時過ぎになる。そして、土曜日・日曜日も部活動があるので、休みはほとんどない。しかし、楽器をうまく吹けるようになりたいと思っているので、嫌だと思っただけは一度もない。今は夏に実施されるコンクールで入賞することを目標にがんばっている。これからも友だちと協力して練習に励んでいきたいと思う。

このように、部活動をはじめ、中学校では小学校と違うところがたくさんある。時々小学校の方がよかったなと思うこともある。しかし、何事にも前向きに考え、精一杯努力して、充実した生活を送っていきたいと考えている。

〇〇さんの「報告文」を読んで、とても感動しました。中学校での新生活の様子が、とてもよく分かりました。わずか2ヶ月ほどしか経ってはいませんが、随分大人びてきたようで、とても嬉しいです。

どうか、これからも一生懸命勉強して、自分のよいところをたくさん伸ばしてください。心から応援しています。(後略)

温かい心のこもった旧担任の先生からの手紙を読んだ学習者たちは、大変喜び、お互いに達成感を分かち合うことができた。

「先生、またこんな勉強しようやな！」授業後のこうした言葉からも、本単元学習が、学習者自身にしっかりと受け止められ、主体的に学習活動が展開されたことがうかがわれた。

(3) 実践例Ⅱ：「東日本大震災の被災者に向けて、自分の思いを届けよう。」

①学習計画及び評価規準

(以下表2参照)(次ページ)

②学習材について

本単元で用いた学習材は、次の3点である。

ア. 授業者自らの岩手県沿岸部におけるボランティア活動の記録及び被災者にいただいた資料

イ. 「気持ちよこめて書こう」(光村図書)

ウ. 「中学書写 手紙を書く」(光村図書)

「ア」の中には、被災者自らが撮影した写真及び自作の短歌が含まれている。「イ」、「ウ」は、手紙を書く際のスキルやモデルを示した学習材といえる。

図6は、単元「東日本大震災の被災者に向けて自分の思いを届けよう」の学習の流れである。

指導にあたっては、まず「ア」を用いて、現地の様子や被災した人の悲しみをしっかりと伝

表2 学習計画及び評価規準

	学習内容	評価規準	指導事項
1次	岩手県陸前高田市の様子を知り、それを見て考えたことを書く。	説明を聞き、自分の考えを、分かりやすく書くことができる。	「話す・聞く」 (1)ーオ
2次	手紙の書き方について理解し、被災者に宛てた手紙の下書き原稿を作る。	1次のワークシートをもとに、自分の考えを書くことができる。 自分の書いた手紙を推敲し、より分かりやすい文章を書くことができる。	「書くこと」 (1)ーウ 「書くこと」 (1)ーエ
3次	宛名、本文等の配置を考え、より気持ちのこもった手紙作成の練習をする。	手本を参考にして、配置やバランスのとれた手紙を作成することができる。	「伝・国」 (2)ーア
4次	自分の思いをこめた手紙を書き、被災者へ送付する。	自分の思いを、読む相手を意識して書くことができる。	「書くこと」 (1)ーア 「伝・国」 (2)ーア

え、学習者一人ひとりの考えを引き出す場面を計画した。

その後、「イ」、「ウ」を用いたスキル学習を行い、資料を提供していただいたT氏（大船渡市在住）への手紙づくりにつなげることにした。

「東日本大震災の被災者に宛てた手紙を書く」ことを単元を貫く言語活動に位置づけ、そのゴールに全員を到達させることで、一人ひとりに達成感を味わわせる全5時間扱いの学習活動とした。

③授業の実際について

写真7は、第1時の様子である。

I C T機器を活用し、現地の状況や被災者の思いをできるだけ分かりやすく説明した。

その際、支援活動で実際に着用した作業着や活動の際に現地で配布された作業上の注意書き等の資料も展示し、臨場感を高めた。

授業開始当初は、「何が始まるのだろうか」とざわついていた学習者たちであったが、説明が進むにつれ、一心にスクリーンを見つめる姿が印象的であった。

授業の終わりに、被災地の様子や被災者の声を、どのように受け止めたかを尋ねた。

どの学習者も一様に、何かを伝えたい思いで溢れている様子だった。

そこで、すかさず切り出した。「資料(写真8)

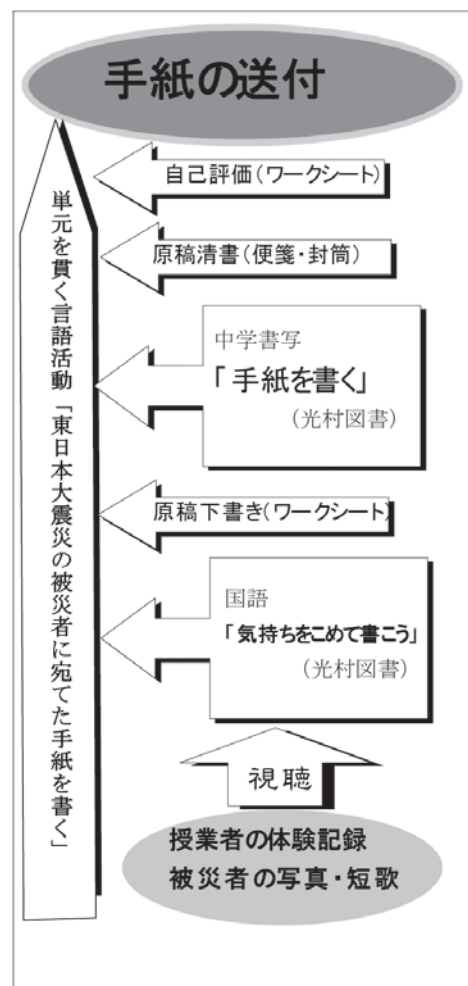


図6 単元学習の流れ

を送ってくれたTさんにお礼と励ましの気持ちをこめた手紙を書こうと思うんだけど…。わずかな間の後、教室がにわかにとよめいた。

この瞬間がまさに『学習意欲』の高まりが生じた場面ではないかと考えている。

その後の「改まった手紙」に関する学習は、学習者の「学びたい」という意欲により、授業者の予想を大きく上回る勢いで展開され、全ての学習者が「東日本大震災の被災者に宛てた手紙を書く」というゴールに到達した。

④検証

右の文章は、**学習者B**によるものである。

東日本大震災の被害の実態を直視し、自らの生き方についてまで考えを広げていることが分かる。

学習者一人ひとりが作成した手紙には、それぞれの思いをしっかりと伝えようと、懸命に努力する姿がうかがえた。

『受け手』に自分の思いを伝えたい」という気持ちが原動力となり、この学習を貫く柱である「東日本大震災の被災者に宛てた手紙を書く」

学習者B

（前略）今回は写真を送っていただき、ありがとうございました。写真を拝見した時、ここには元々、どんな景色があったんだろう、どんな人達が住んでいたのだろう、そして、どんな暮らしをしていたのだろう、と沢山考え、今の自分がどれだけ幸せかということを実感しました。
今回私は震災には遭い wasn't でしたが、他人事とは思わず、身近に起きたら、どうすればよいかということを考えさせられました。（後略）

ことを支えたものと思われる。

単元学習終了時における「学習記録用紙」には、次のような感想があった。

- 手紙の書き方がよく分かりました。「拝啓」ではじまり、「敬具」で終わることなどが分かり、よかったです。今度、目上の人に手紙を書くことがあれば、この学習で習ったことを思い出して、書こうと思いました。
- 私は、「東北には行けないけど何かできることはないかな。」といつも思っていました。そしたら先生が「今回の学習では被災者に手紙を書きます」と言ったので、「これだっ」と思いました。私の書いた手紙を読んで、受け手がどう思うのかは分からないけど、私は手紙が書けてよかったし、この学習ができてよかったです。
- 日ごろつかわない言葉で、丁寧に感想や思いを伝えるのは、とても大変だけど、本当に思ってるということが、とても深く伝わる



写真7 岩手県沿岸部の説明を聞く学習者



写真8 T氏の写真と短歌（全10枚中1枚）

と思った。

○今回の学習は、被災者の気持ちや、被災地がどんな状況かを受け止めることと、改まった手紙の書き方を、しっかり頭にたたき入れることができました。またこういう機会があったら、何かをしたいです。

○「改まった手紙」を書いて、今まで体験したことのない、一種のきんちょうをおぼえた。相手が会ったことのない人なので、字をきれいに書いたり、何度も漢字や内容に失礼がないかなどを確かめたりした。終わった後は、きんちょうの糸が切れて、少しほっとした。

「東日本大震災の被災者に手紙を送る」というゴールに向け、言葉を精選しながら、その到達点までひたむきに学習を進めた姿が読み取れる。学習者一人ひとりに「学びたい」という思いを喚起させた効果だと考えている。

4 「Ⅲ『学び続ける』学習の手立ての開発」の実践

(1) 授業開始時の「スピーチ学習」の導入

①導入の契機

第1学年の3学期末における観点別評価「B」の到達者の割合を分析したところ、次のような結果となった。(平成23年度3学期、対象学習者数180名)

「話すこと・聞くこと」	…80%
「書くこと」	…72%
「読むこと」	…89%
「伝・国」	…92%

このデータから、「読むこと」、「伝・国」に比べ、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の学習が十分に達成できていない学習者が多いことが分かる。

また、同時に実施した意識調査で、「書くこと」に次いで「話すこと・聞くこと」の領域に苦手意識をもつ学習者が多いことも分かった。

特に、自分の考えを求められた際、話したいことを順序よく説明できないという課題意識を有する学習者が数多く存在していることが明らかとなった。

さらに、学習者の多くは、人前で話することが上手になりたいという願いをもっていることも分かった。

これを契機に導入したのが、「スピーチ学習」である。

②実践

ア. 授業における位置づけ

「スピーチ学習」は、毎時間、はじめの3分間を使い実施している。二人組のペアを作り、話し手と聞き手で交互に自分の考えを伝え合う学習活動である。

話す相手を隣の友達に限定することで、緊張感を払拭し、自らの考えを自由に語ることのできる雰囲気づくりに配慮している。

イ. 題材の設定

毎時間のテーマは、全ての学習者が自分の考えを表現しやすいものとなることに配慮し、日常生活のあらゆる事象に目を向け、毎回準備している。

その日のテーマをミニ掛け軸にセットし、始業の挨拶後、「今日のお題は…これっ!」という合図で黒板に垂らし、スピーチ開始の合図としている。(写真9)

毎年5月ともなると、挨拶後の学習者の視線は、「今日のお題はなんだろう?」という期待感から、専ら授業者が手にするミニ掛け軸に集



写真9 「お題」に注目する学習者

中するようになっている。

(2) 校内掲示板を活用した「ことばの広場」

校内で空きスペースとなっている壁面を活用し、「ことばの広場」を設置した。(写真10)

ここには学習者が主体的に言葉について考えたり、学んだりすることができるように配慮した掲示物を準備し、定期的に入れ替えている。

主な内容は次のとおりである。

【漢字・語句関係】

- ・季節にちなんだ難解漢字の読み方クイズ
- ・郷土に関するご当地漢字クイズ
- ・四字熟語に関する穴埋めクイズ
- ・オリンピックに関する外来語クイズ
- ・早口言葉に挑戦コーナー

【文学関係】

- ・著名な文学者の名前当てクイズ
- ・川柳に関する穴埋めクイズ

【鑑賞関係】

- ・好きな熟語の書写作品（※学習者作成）
- ・著名な詩人による、各月に関連する詩

【読書関係】

- ・「お勧めの一冊紹介」（※学習者作成）



写真10 校内掲示板に設置した「ことばの広場」

(3) 小中連携の語彙指導

①小中の教師による合同学習会

題材の設定や構成の組み方等、作文を書くことに対して、苦手意識を抱える学習者は少ない。

また、その多くは小学生時代から引き続いているケースが多いことも明らかとなった。

そこで、小中9年間を通した効果的な作文指導を図ることはできないかと考え、校区内の小学校教師に呼びかけ、小中合同の学習会を開催することにした。

②『感想の言葉』カードの作成

学習会では、小中それぞれの学習者の作文を分析し、その実態について情報交流することにした。

その結果、小中ともに「自分の気持ちや考えを表す言葉」が、「楽しかった」や「うれしかった」等、単調で画一的であることが共通しており、こうした場面で、より豊かに自分の思いを表現できるようにするための語彙力を身につけさせる必要があるのではないかという意見が出された。

この意見に基づき準備したのが、『感想の言葉』カードである。(写真11)

これらのカードには、主に文末で用いる「気持ちや考え等を表す言葉」を、発達段階に応じて「レベル1」から「レベル8」のカードに分類し、一覧にしている。

③『感想の言葉』カードの活用

『感想の言葉』カードの活用にあたっては、次に示すような活用例を考え、小中の国語科授業において、実際に使用しながら、その効果的な活用方法について現在考察中である。

④検証

図7のグラフは、平成24年度末の基礎・基本の定着度順に分けたA層～C層ごとの、「スピーチ学習」に関する考えを調査した結果である。

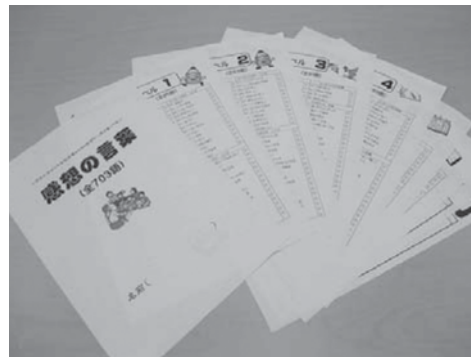


写真11 作成した「語彙カード」(全8枚)

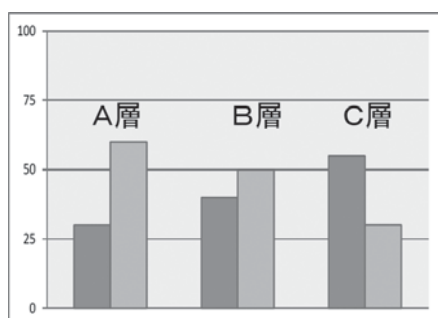


図7 「スピーチ学習」に関する意識調査結果

各層とも、左側は「以前より話したり、聞いたりすることが楽しくなった」、右側は「以前より友達の意見について自分の考えをもてるようになった」と考える割合である。

C層の学習者にとっては、この学習が、「話すこと・聞くこと」の活動に対する苦手意識の解消につながっていることが分かる。

また、A層、B層の学習者にとっては、他者の考えを、より批判的に聞く態度を育成していることにつながっているのではないかと考えている。

さらに、もう一つの成果としてあげられるのは、これまで授業やテスト等において小作文を書くことを大変苦手とし、無回答で終わることが多かった学習者の中に、この「スピーチ学習」の導入を機に、課題についての自らの考えを短

い文章ではあるが、文字で表現しようとする学習者が現れるようになったことである。

これは、毎回替わる「お題」についての考えを、瞬時に話す練習を繰り返すことで、自分の考えを発することに自信がもてるようになり、それを文章化することへの抵抗感を軽減させたことに起因しているのではないかと考えている。

以上のことから、毎時間の「スピーチ学習」の継続は、学習者一人ひとりの「話すこと・聞くこと」の基礎・基本の定着や、さらには「書くこと」についても一定の成果をもたらしているのではないかととらえている。

この「スピーチ学習」についての学習者の感想には、次のような記述があった。

- 先生が出すお題が毎回ちがうから、とても楽しいです。これからもスピーチを続けてほしいです。
- スピーチが少し短い時があったので、これからはしっかりと自分の意見を発表したいです。
- 発表するのはあまり得意ではないけど、みんなの意見を聞くことができてよかったです。
- このスピーチで、男子とも話すことが多くなった。

「感想の言葉」カードの使い方

<「感想の言葉」カードを用いた作文指導の例として、次のような扱い方を考えてみました。>



「レベル1」～「レベル8」までの8枚のカードを子どもに配布し、「先生あのね」(小学校低学年)～「生活ノート」(中学校)における日記記入に役立たせる。各カードで使用した語彙にマーカーで印をつけさせ、全て印がついたカードには「合格シール」等を張ったり、「言葉貯金」に加えたりして、子どもの努力を最大限評価する。



自分の考えを書く学習の場面で、カードの中から使用する語句を授業者が指定し、意図的に新しい語彙を習得させる。



教室にキャビネットを設置し、8枚のカードを各引き出しに収納する。自らの実態に応じ、子どもたちに自由にカードを取り出させ、国語科をはじめ他の教科においても使用させる。



生活ノートに1枚、カードを貼り付けさせ、毎日の記録文を書く際に活用させる。新しい語句を意図的に用いている子どもを最大限評価する。

- 一つのお題について、みんながそれぞれ思ったことや考えたことなどを知ることができて面白かった。
- お題にそって隣の人と話すのが楽しかった。スピーチすることで、授業以外でもしゃべるようになった。
- 友達のスピーチについて考えをもつことが、はじめは苦手だったけど、だんだんなれてきた。
- 自分のスピーチについて、友達の考えを聞いたのがうれしかったし、役に立ったと思う。

5 成果と課題

(1) 学習者Cの手紙

図8は、単元「東日本大震災の被災者に向けて、自分の思いを届けよう」において、学習者Cが書いた手紙である。「書くこと」を大変苦手としており、自分の考えや感想等の記述を求められても、ほとんど回答することのなかった学習者である。

しかし、今回の単元学習においては、終始授業者が手紙の形式等を確認したり、自ら漢字や語句を辞書で調べたりして、精一杯の心をこめた手紙を完成させた。

(2) 検証クラスにおける学習者の変容

平成25年度の1年間、第1学年7クラス中、1クラスを、この研究の検証クラスとして担当し、学習者の変容を分析することにした。

①学習者Dの「学習記録用紙」の変容

写真12・13は、学習者Dの1学期当初と2学期の「学習記録用紙」の変容を示したものである。

乱雑な書きぶりで、途中でメモをやめ、しかも「評価」の欄も未記入である1学期に対し、2学期においては、大変丁寧な文字で、色使いにも工夫がみられる。また、全体のバランスや文字の配置にも配慮がみられ、まさに板書と一体化した学習記録となっている。

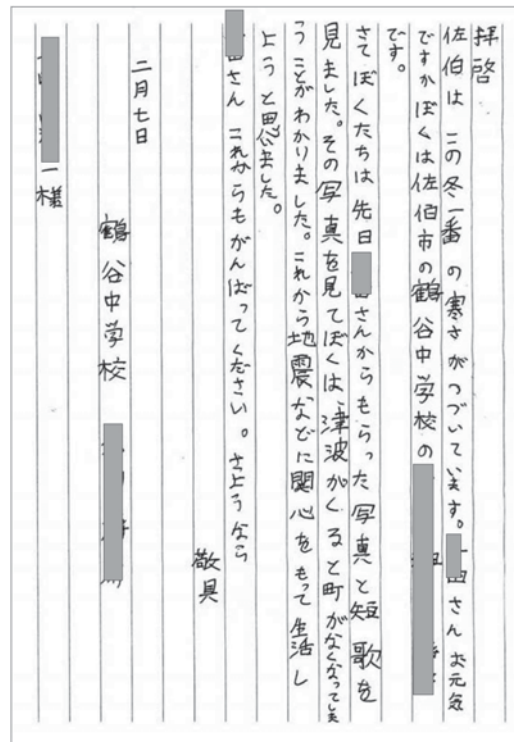


図8 学習者Cが書いた手紙（実物模写）

4月に「国語が嫌いだ」と断言し、当初は学習に対する意欲が感じられない学習者Dであったが、「学びやすい」学習環境の中で、徐々に国語科学習に対する興味関心を高め、「スピーチ学習」においても、意欲的に自分の考えを友達に伝えるように変わっていった。

さらには、授業中の発問に対して自主的に発言したり、家庭学習にも意欲的に取り組んだりする様子もみられるようになった。

②定期テストにおける得点の推移

図9・10は、1学期と3学期の定期テストにおける検証クラスの得点分布を示したものである。

得点分布の状況から、下位層の学習者の人数が減少し、どの層の学習者も、より高い得点層へ移行していることが分かる。

次に、図11は年間の定期テストの学年平均点との得点差の推移を示したものである。

年度当初、クラスの平均点は11ポイント以上

学年平均を下回っていたが、テストを重ねるごとに徐々に学年平均に近づき、後半では学年平均を上回る結果となっていることが分かる。

以上の結果から、これまで進めてきた、「Ⅰ『学びやすい』学習環境づくり」、「Ⅱ『学びたくなる』学習活動の工夫」、「Ⅲ『学び続ける』学習の手立ての開発」を基盤とする国語科授業づく

りの実践は、学習者一人ひとりの基礎・基本の定着に、一定の成果をもたらしたのではないかと考えている。

今後は、さらに効果的な手立てや学習材の開発を深化させていくとともに、他教科や小学校との連携等も通して、研究の広がりを大きな課題として取り組んでいこうと考えている。

写真12 学習者Dの学習記録用紙（1学期）

写真13 学習者Dの学習記録用紙（2学期）

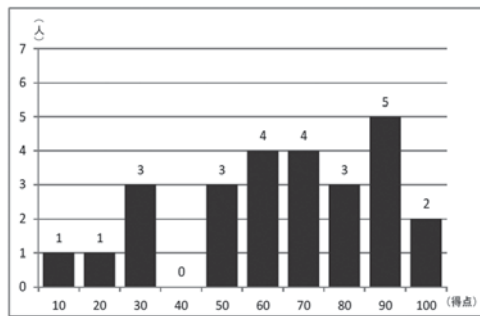


図9 検証クラスの得点分布（1学期）

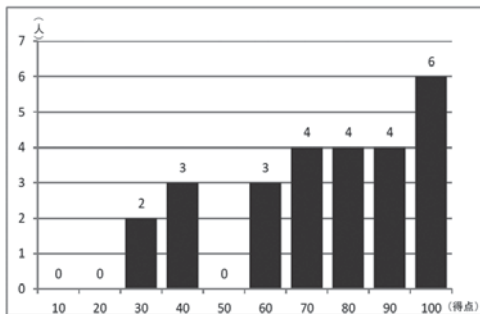


図10 検証クラスの得点分布（3学期）

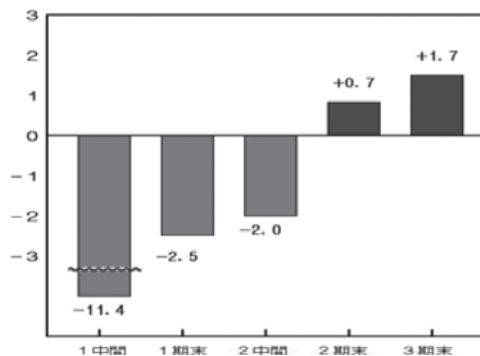


図11 検証クラスの平均点の推移

おわりに

毎学期の最後に、学習者一人ひとりの国語科授業に対する考えを知るために、「先生への通知表」と名づけたアンケートに協力してもらっている。その中の「自由記述欄」に、次のようなコメントがあった。

○いつもは不満をもらしている友達たちも、国語の授業のときは楽しそうに受けていて、それだけ先生の授業がよいというこ

となのでしょうか。この1年間国語の授業では大変お世話になりました。

○国語はあんまり好きじゃなかったけど、好きになりました。それに、最後のテストで一番満足のいく点数がとれたのでうれしかったです。

○特に面白かったのは、教室でエビフライを揚げたことで、あれには驚きました。他の先生とは違う面白さがありました。

学習者のこうした言葉には、心から励まされ、次の授業づくりに向けた活力を授けられる。

と同時に、学び手にしっかりと向き合い、それぞれの実態に寄り添った学習指導の大切さを、学習者自身に改めて示唆してもらっているように思えてならない。

これからも、目の前の学習者とともに、常に「学び続ける」教師でありたいと考えている。

【参考文献】

- 佐藤愼二・漆澤恭子（2011）「通常学級の授業ユニバーサルデザイン」日本文化科学社
- 桂聖・廣瀬由美子編（2011）「授業のユニバーサルデザイン3」東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編（2011）「授業のユニバーサルデザイン4」東洋館出版社
- 須田実編（2007）「わかる板書で読解力を高める」明治図書
- 植西浩一（2009）「活用型の国語科授業づくり 中学校編」明治図書
- 吉本清久編（2009）『『活用型学力』習得の国語科授業開発』明治図書
- 田中洋一編（2009）「中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開」東洋館出版社
- 井上一郎（2005）『『読解力』を伸ばす読書活動』明治図書